

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校後期入学試験問題

第一限 国 語 (その一)

注意 解答欄は問題用紙の（その六）・（その七）にあります。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現生人類がどのような道筋をたどって進化してきたのか、今日ではDNAの分析から多くを推測できる。人類が遺伝的に近縁なチンパンジーやボノボと袂を分かったのはおよそ二〇〇万年前、そのなから進化したホモ属のうち和名ヒト、学名ホモ・サピエンスの現生人類が東アフリカで暮らし始めたのは二〇万年ほど前と推測されている。①一二万年ほど前にヒトは新天地を求めて移住をはじめ、いくつもの経路を経てやがて地球上にあまねく分布することになった。

農業がはじまる一万年ほど前まで、ヒトは食べ物も暮らしに必要なものも、ほぼすべてを採集・漁労・狩猟、すなわち広義の採集によって得ていた。農業開始後も、採集は重要な営みとして継続され、農地と共に生物資源の採集地である多様な樹林、草原、湿地がモザイクをなす環境で暮らした。それに対して、食品を含む多くを工業製品に依存する現代の暮らしの歴史は、二〇〇年程度に過ぎない。

生物環境への適応進化には、何世代もの世代時間が必要である。ヒトが成人して子どもをつくるまでの約二〇年を一世代として「ものさし」にすれば、適応進化に十分な時間なのかどうかを判断できる。ヒトが出現する前から人類が続けてきた採集は、何万世代、あるいは何十万世代も続いているので、私たちの心も体もそれに対して十分に適応しているはずである。ドングリや貝を拾うことが子どもたちの楽しい遊びであり、魚釣りや「くだもの狩り」が子どもも大人も楽しめるレクリエーションであるのはそれゆえだろう。

農業開始から現在までの人の世代数は四〇〇世代程度である。早くから牛を飼って乳を飲む暮らしを始めた人々は乳糖を分解する酵素をもっているのに、ごく最近になってから牛乳を飲みはじめた日本人の中にはこの酵素を持たない人が多いことなどから、栄養摂取に関する生理的適応が起こるにはそれが十分な世代数であることがわかる。しかし、体と心の多くの特性の適応進化に十分な時間ではなく、それらはいまだ採集生活に適応しているといえそうだ。

近代技術と工業にもとづく生活の継続は、一〇世代程度でしかない。私たちが、生物としては現代の生活に適応しえていないのは当然である。ヒトには、生物としての適応に加え、ヒト特有の文化的な適応、すなわち言語と教育による経験の共有や科学技術などによる適応の可能性がある。しかし、技術や社会の変化のスピードがあまりに速すぎて文化的な適応も追いついていないようだ。原子力災害は、見方を変えれば、その顕著な例の一つといえるだろう。ヒトが自らが作りだした環境に生物的にも文化的にも適応できないという、不適応現象は、今後ますます深刻化する可能性がある。問題の解決には、概して採集生活に適応したままの私たちの心が本来どのような環境を求めているのかをしっかりと認識することが必要だろう。

人類のふるさと東アフリカで私たちにつながるホモ属のヒトが誕生した頃の生息環境は、ホモ属の祖先の人類や霊長類が暮らしてきた熱帯雨林の中でも、乾燥地帯の草原でもなかったようだ。初期のヒトが暮らしたのはサバンナであり、疎林、草原、河畔林、湿地などがつくるモザイク環境であった。変化に富んだモザイク環境において、多様な生物を採集して餌とする雑食の性質を強めたのがホモ属である。現生人類は、その特性ゆえに、幾多の環境変動を乗り越え、今日まで生き残ることができたといえそうだ。

モザイク環境の一つの重要な要素である湿地では、貝や魚などのタンパク質を多く含む多様な餌がとれる。そのことは次の二つの理由で、脳の発達を促しただろう。第一に、タンパク質の豊富な餌をとることで、脳の発達のための栄養的条件が満たされた。第二に、変化に富んだモザイク環境を縦横に利用した多様な資源を採集する暮らしでは、感覚器官は絶えず複雑な刺

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校後期入学試験問題

第一限 国 語 (その一)

激げきを受けると同時に、空間の認知にんちと記憶きおくの発達を促す強い選択圧せんたくあつが作用する。環境のモザイク性が人の特別の知的能力を適応進化させたといつてよいだろう。

環境モザイク性は、多様な樹林あり草原あり水辺もある「さとやま」の特徴とくちゆうでもある。モザイク環境への適応進化が人の知的能力を発達させたのだとしたら、さとやまで五感を研ぎ澄とましながら遊んだり、学んだりすることは、子どもたちの成長過程においても重要な意味をもつといえそうだ。

(鷺谷わしたにいづみ「人を育んだモザイク環境」)

問一 傍線部①「一二万年ほど前にヒトは新天地を求めて移住をはじめ、いくつもの経路を経てやがて地球上にあまねく分布することになった」とありますが、「ヒト」が「地球上にあまねく分布する」ことができたのはなぜだ、と筆者は考えていますか。八〇字以内で書きなさい。

問二 傍線部②「モザイク環境への適応進化がヒトの知的能力を発達させた」のはなぜだ、と筆者は考えていますか。一〇〇～一二〇字で書きなさい。

令和六年度徳島文理中学校後期入学試験問題

第一限

国

語

(その二)

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が小学生のころ、憧^{あこが}れたのが、放射能の研究で女性としてはじめてノーベル賞を受賞^こしたことで知られる、キュリー夫人でした。

いまはどうか知りませんが、私の子どもころには図書室に行くときズラリと偉人^{いじん}伝が並んでいて、小学校低学年のころ、まるで何かにとりつかれたみたいに、片^{かた}っ端^{はし}から、それを読んでいきました。

①偉人伝の人たちは、ウルトラマンと違って、地^ち続^{ぞく}きのヒーローという感じがしました。エジソンにしろ、リンカーンにしろ、子どものころは度外れて変なところがあったのです。

完全無欠だから「偉人」になったんじゃない、むしろ人とは異なる欠点や過剰^{かじよう}さを抱^{かか}えていたからこそ、ほかの誰とも違う道を歩むことになったんじゃないか。

最初は欠点だと思われていたことも、そうなる欠点じゃなくなるんですね。度を越^こした欠点こそが、その人が道を切り開くときの、ほかの誰にもない武器になっていく。

おチビで体が弱かった私は、欠点をバネにした偉人たちの逆転劇^{げき}に夢中になってしまったというわけです。

キュリー夫人にしても、やっぱり、とんでもない欠点がありました。それは「没頭^{ぼつとう}しすぎる」ということ。

偉大な業績はさておき、幼い私がなにより惹^ひかれたのは、そこです。なにしろ本を読んでいると、あまりに没頭しすぎて、周りがすっかり見えなくなってしまうというのですから。

彼女が読書に没頭しているとき、兄弟たちがふざけて周りに椅子^{いす}を積みあげてみたら、それでもやっぱり気がつかなくて、読みおわって立ちあがるときに、その椅子がガラガラと崩^{くず}れて、はじめて気がついた。それでみんなに笑われても、本人は、どうして自分が笑われたのかわからなかったというのだから、相当なものです。私も本の虫だったので、これにはすっかりうれしくなっていました。

読書する喜びを最初に教えてくれたのは、両親でした。

父も、母も、私が物心つくかつかないころから、絵本の読み聞かせをしてくれました。

子どもって、しつこいですからね。『もじやもじやペーター』という絵本の「もじやもじや」という言葉の響きが気に入って、何度も読んでくれとせがまれたのがこたえたのか、母はいまだに「百ぺん言わされた」「死ぬほど疲れた」と嘆^{なげ}いています。

はじめて親に頼^{たの}んで買ってもらったのは『王さまの剣^{つるぎ}』というアーサー王の物語。

誰も抜^ぬくことができなかったエクスカリバーという剣を、少年が抜く場面が大好きでした。私が神話や伝説を好きになったのは、この本からだったのかもしれない。

野尻湖^{のじり}にある祖母の家の屋根裏で、ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』を見つけたときのこと忘れられません。そこは叔父^{おじ}の子どもの時代の勉強部屋で、古い時代の本がそのまま残っていたのです。うっすらと本に積もっていたほこりを払^{はら}うと、日が暮れるのも気づかないまま、夢中で読みふけりました。

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校後期入学試験問題

第一限 国 語 (その四)

私が、あまりにも本ばかり読んでいたので「このままでは実生活がおろそかになる」と心配した両親は、やがて、本禁止令をだすようになりました。

「部屋を片付けるとか、宿題をするとか、ほかにやるべきことはいろいろある。そういうことをおろそかにするな」と。見つかると思われ、しまいは、ふとんをかぶり、懐中電灯を持ちこんで、薄暗い灯りを頼りに読んだりもしました。そこまでして読みたいか、って話ですけど、私は、だんだん本を読むのはいけないこと、後ろめたいことのように思うようになっていたんです。

ところが、キュリー夫人は、人からどんなに笑われようと、そんなことはおかまいなし。黙々と本を読みつづけ、自分の研究に没頭して、ついに単身ソルボンヌ大学に乗りこんでいきます。生活費や食費にも事欠くなかで、学ぶ、学ぶ、学ぶ。赤かぶとサランボ以外口にせず、ひたすら勉強していたこともあったそうです。私は、何があろうと揺らぐことのない、あの学ぶことへの飢えに惹かれたのだと思います。

『獣の奏者』のエリンも、そうですね。

あの物語の中で、エリンを突き動かしているのは「もつと学びたい」「もつと知りたい」という飽くなき探究心です。
(中略)

少女時代のエリンは、自分の命を救ってくれた恩人でもある蜂飼いのジョウンのもとで、学ぶことの喜びに目を開かれています。

幼いころから、私も、いつも不思議でした。

なぜ、知りたいと思うのか。なぜ自分が、時の流れや、宇宙の果てしなさや、答えがすぐには出ないことを考えつづけずにはいられないのか。

この世界には、未知のこと、わからないことがたくさんあって、どうしてそうになっているのかを、もつと知りたいと思う。どこから湧いてくるのかもわからないこの気持ちは、たぶん、理屈ではないのでしょう。

その道を究めたら、どんな答えが待っているかわからないまま、ただ、目の前の問いと一心に向き合い、学ぼうとする人間がいる。

② 私は、いまでもそういう人に無性に惹きつけられています。

i P S 細胞を開発してノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥さんが、テレビのインタビューの中で、こんなふうなことをおっしゃっていました。「実験を繰り返しながら、みんながページをめくっていて、最後にページをめくったときに『あつた!』と言ったのが自分だった、それだけのことです」と、先人の功績を讃えたのです。③ ああ、すばらしい言葉だな、と思いました。

※ エポックメイキングな大発見は、それまで積みあげてきたものがあつてはじめて起こるもの。ぼたぼたとしずくが落ちて、やがてコップがいっぱいになり、最後の一滴であふれだすみたいに、物事が変わるのはつねに最後の最後の瞬間が来たときなのです。

子どものころ、学者や研究者に憧れたのは、そのせいかもしれません。

受 験 番 号

令和六年度徳島文理中学校後期入学試験問題

第一限 国 語 (その五)

自分ひとりの努力では、一生のあいだになしえることは限られているけれど、学ぶことでその道を究めようとした人たちは、そうやってバトンを、次の世代、また次の世代へとつないでいくことができる。

人は、生まれて、生きて、やがて死んでいきます。

どんな人も、一回性の命を生きている。そのなかで、いったい、自分は何をなしえるのだろう。

体が弱く生まれたからこそよけいに、私はそのことをずっと考えつづけてきました。

有限の命を生きるしかない人間が、それでも何かを知りたいと思い、それまで誰も解くことができなかったことに挑んで、それによって、この世界の何かが確実に変わることがある。変わったからとて、いずれは地球も砂になりますから、じつは意味のないことなのかもしれませんが、少なくとも、生きているあいだ、人の幸せとなる何かを生みだせるなら、それはそれで、意味があるのではないか。

自分も、そんなふうになしえる人になりたいと願った。

④ 学ぶことを志した先人たちがそうしてきたように、何かが少しでも変われることを夢見ながら、自分のページをめくっていかざるをえない衝動を、幼いころから確かに抱えていた気がするのです。

(上橋菜穂子「物語ること、生きること」)

※ エポックメイキング…画期的な

問一 傍線部①「偉人伝の人たちは、ウルトラマンと違って、地続きのヒーローという感じがしました」とあるが、作者は「偉人伝の人たち」のどういう点を「地続きのヒーロー」と感じ惹かれたのか。本文中の言葉を使って、百字以内で答えなさい。

問二 傍線部②「私はいまでもそういう人に無性に惹きつけられてしまいます」とあるが、筆者はどういう人に惹きつけられるのか。本文中から六十字以内でさがし、はじめとおわりの五字を書き抜きなさい。

問三 傍線部③「ああ、すばらしい言葉だな、と思いました」とあるが、どんなところがすばらしいのですか。本文中の言葉を使って六十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部④「学ぶことを志した先人たちがそうしてきた」とあるが、「先人たち」はどうしてきたのか。本文中の言葉を使って七十字以内で答えなさい。